

現代における橋の怪異と地域社会に関する一考察 —人口流出にともなう「心霊スポット」の発生—

福西大輔

はじめに

古来より橋は怪異が起きやすいところだと日本人は認識してきた。現代でも幽霊の出現、または超常現象が起こるとされる「心霊スポット」として橋は知られている。「心霊スポット」という言葉は、近年生み出された概念である。住家正芳によれば、「心霊主義は、ニューソート、神智学とともに一九七〇年代のアメリカで広がったニューエイジの思想的源泉となる。その影響もあり、日本でもオカルトブームとよばれる現象が一九七〇年代におき、一九七四年を境として、念力やテレパシーといった超能力やUFO、予言、怪奇現象などを取上げるテレビ番組が急増した。(中略)一九八〇年代にはいると、テレビ番組で宜保愛子などの霊能者が視線者の投稿した写真を心霊写真として読みとくという手法が定着していく。さらに、写真だけではなく、特定の場所に霊の存在を見出すことで、「心霊スポット」が設定されていった」という(住家正芳 2014 554)。

熊本地震で崩れ落ちた阿蘇大橋もこうした「心霊スポット」の一つである。「阿蘇の赤橋」と呼ばれ、自殺した人々の血で赤く染まることからその名が付いたといわれていた。この橋から身を投げた人は百人を超え、そのため、その死者たちのうめき声が橋の下から聞こえる、足を引っ張られる、飛び降りたい気持ちになる等の心霊現象が起こる場所として若者を中心にインターネットなどで語られていた。また、阿蘇大橋の南側には「自殺者の霊が棲みついているレストランの廃墟がある」という噂も知られていた。これらの話は、いわゆる「都市伝説」と呼ばれるものになる。飯倉義之によれば、都市伝説とは「(前略)主に都市部の若者の間でささやかれる、怪談や笑い話、おまじないやジnkスの類であった。この都市伝説という言葉は、アメリカの民俗学者ハロルド・ブルンヴァンが、マスメディアを通じて広まる現代的な逸話や怪談、笑い話に与えた呼び名であった」という(飯倉義之 2015 100)。

常光徹によれば、橋は異界との接点であると述べている。異界とは雲の上や海底・地中、あるいは死後の行方など、日常とは違う不思議な世界だとした上で、「橋のたもとに祀った女神である橋姫にまつわる伝説をはじめ、幽霊の出没が語られるなど、川をまたいで二つの岸をむすぶ橋にも、この世と異界との接点としての性格が認められる」ともいう(常光 2009 245)。このような解釈は、民俗学において橋の怪異譚を分析する際に定説的なものとして利用されてきた。しかし、土居浩は「かつての民俗学では、メディアによる操作に留意しつつも、化物屋敷などの前近代の事例との共通性を見出す傾向にあった。(中略)モノノケを「物の怪」と書けば精霊が何らかの形を示すことを意味するが、「物の気」と書けば森羅万象に宿る精霊を意味し、アニミズムの心性がうかがえると説く。つまりは、悠久の過去から連綿と継続する心性、というわけである。とはいえマスメディアのみならず、インターネットの普及など、メディアの変容を経た現在においては、過去から蓄積された情報の再編集、との視角から検討が重要であろう」という(土居浩 2014 553)。こうした見解もふまえ、現在語られる橋に関わる怪異について改めて検討してみたい。事例として阿蘇大橋に関わる怪異、「阿蘇の赤橋」を取上げる。そして、地方において「心霊スポット」と呼ばれる場所の現代社会における意味も考える。

第1章 阿蘇大橋の概要

阿蘇大橋は、熊本県阿蘇郡南阿蘇村立野と南阿蘇村河陽字黒川の国道325号の黒川を跨ぐところにあった。熊本市など都市部と南阿蘇を結ぶものとして機能してきた。

ここは阿蘇神話の舞台でもある。大昔、阿蘇は外輪山に裂け目がなく、カルデラには満々たる湖水が蓄えられていた。健甞龍命（阿蘇大明神）は、水を流して田畑を作るため外輪山の一部を蹴破って湖水を熊本平野へ流出させたのが、白川と、白川水系の黒川になったという（荒木精之編 1975 78）。

また、この場所は南郷往還の要所でもあった。南郷往還は、熊本から阿蘇の南郷谷を通り豊後竹田に至る道路である。起点は白川左岸の長六橋で、ここから白川沿いに東上していき、南郷谷へは阿蘇外輪山の一角、俵山の難所を越えていった。そして、七曲りを下り、南外輪のふもとを流れる用水路沿いに高森へ入った。藩政時代、南郷往還は天津と阿蘇南郷谷を結ぶただ一本の重要な往還（道路）であった。

橋の架かる前、谷間から谷底は風光明媚な温泉地として、栃木温泉や戸下温泉は知られていた。『熊本の温泉と休養地』によれば、栃木温泉は、寛文4年（1664）に細川藩士が狩りの途中、手負いの猪が白川の溪流で傷を癒しているのを見つけたのがはじまりだと伝えられている（岩本政教編 1985 80）。また、近代以降、阿蘇山の登山口にあたり、登山前に英気を養ったり、登山の疲れを癒したりする場所でもある。その栃木温泉を源流として明治期に戸下温泉は整備されていく。

このような地に架かっていた橋が阿蘇大橋で、アーチ型の橋であった。昭和46年（1971）に開通した。全長は205・9メートルもあり、その高さは76メートルに及んだ。開通当時、橋に塗られていた赤い色から「赤橋」とも呼ばれた。

1980年代に入ると「心霊スポット」として名をはせるようになっていった。それにともない「ここから身を投げれば絶対に死ぬる」という噂が広まり、自殺志願者が訪れるようになった。橋のたもとは地元住民により自殺を呼び止めるために「まてまて地蔵」が設置された。

平成28年（2016）4月16日に起きた熊本地震の「本震」では大規模な土砂崩れがおき、阿蘇大橋は崩れ落ちた。現在、新設される予定の阿蘇大橋は、元の位置より下流に架けられることが決まった。それに先立って阿蘇大橋の迂回路として、阿蘇長陽大橋を含む村道・栃木～立野線、長陽大橋ルートが応急的に開通している。

第2章 「阿蘇の赤橋」に関する怪異譚

熊本地震で落ちるまで「阿蘇大橋」は、若者たちを中心に口コミからインターネットまで、様々なメディアで「阿蘇の赤橋」という「心霊スポット」として取り上げられていた。そこで、まず、インターネット上で語られている「阿蘇の赤橋」について幾つか見ていきたい（註1）。

（事例1）数年前の夏、高校の時の友だちを誘って、肝試しで阿蘇の赤橋に行くことになりました。現場に着いたのは、午前1時頃だったと思います。噂されているほど恐ろしくなかったのも、廃屋になっているレストランの方にも行くことにしたのです。この時、何を思ったのか、友人がトイレの鏡を外して持って帰ってしまいました。僕はイヤな感じがしていたのですが、彼は気にしていない様子でした。しかし、それが原因となって、大変なことが起きてしまったのです。2カ月くらい経った頃、鏡にヒビが入ったのです。すると、その1週間後に、彼の祖母が亡くなりました。おかしいことは、それだけでは済みませんでした。祖母の葬儀が終わってから2週間ほど

経つと、今度は、妹が交通事故に遭ったのです。友人は「鏡が不幸を呼んでいる」と察して、慌てて鏡を返しに行きました。

(事例2) その日は、草野球のメンバー数人と飲んで、怖い話大会が始まりました。怖いのが嫌いな人たちは次第に別室で寝始め、気が付いたら男4人になっていました。1時過ぎにKが遅れてきて、飲んでないから車出せるということで、赤橋に行きました。

物凄い霧がかかっています。1人が橋から河原まで下ろうと言い出し、多数決で採択し、皆でいくことになりました。暗い中、梯子を降り、河原へという時に「ザガザガザ」と何かがこちらに駆け寄ってくる音がしました。全員がパニック状態になり、引き返し、車まで疾走しました。車に戻ると、Kだけが妙に青い顔をして黙っています。気になったので車中で問い詰めると、走ってくる奴の顔を見たと言います。車内は色めき立ち、全員で特徴を聞いてみると「輪郭はハッキリしているのに、顔だけはなんだかボヤッとしていて、ただやばいって感じだけは伝わってきた。捕まったら死ぬと思った」というのです。その後、宿に戻り、酒盛りを再開したが、突然コップが割れたり、原因不明の停電が起きたり、誰もいないのにチャイムがなるという怪奇現象が起きました。酒の力もあり、何故だかその度大盛り上がりしたが、ただ、Kだけは「みられている気がする」などと言い、青い顔をしていました。

そして、翌日、先に寝てしまった先輩が怖い顔をして「おまえ昨日の夜、何処にいった？」とKに突然質問してきました。「赤橋に」というと、5人集められて正座させられ、説教をくらいました。「誰が先輩に教えたのだよ」と犯人探しが始まったが、皆違うというのです。すると、先輩がKを指差しながら、「別に聞かなくてもわかるわ。お前が肩に乗っけるとんじゃ」というのです。先輩は「みえる」体質の人らしく、昨晚悪夢をみて、起きたら凄い寒気を覚え、Kを一目見た時に大体わかったらしいのです。先輩は御戒いのようなことをして、「これ急応処置みたいなものだから、ちゃんとしたとこで祓ってもらい。じゃねえと、たぶん死ぬぞ」とぼっそりと言ったというのです。

(事例3) 私の友達で、かなり幽霊が見える人がいます。その彼が阿蘇の赤橋の下に降りる階段があって、そこを降りた時の話をしてくれました。阿蘇の赤橋はかなり高い橋で、100mはあるかと思います。飛び降りれば、命はありません。真下に岩や砂利の河原が広がっているといま

す。そこには、霊となって漂う無数の人影が見えるそうです。その中に、母親と幼い娘の霊がいます。幼い娘はなぜ死んだのかわからない様子で、彼に遊ぼうと手を伸ばしてきます。でも、彼の手には触れられず、哀しい顔で彼を見たというのです。

(事例4) ある男性は自殺の名所だとは知らずに、親戚の家を訪ねて阿蘇大橋を車で通ったそうです。しかし、橋に近づくにつれて激しい頭痛や悪寒に襲われて顔面蒼白になりました。渋滞で橋の真真中に止まると、日頃は健康そのもののだというにも関わらず、いきなりあらゆることが嫌になって橋から飛び降りたい衝動にかられ、危うく自殺するところだったそうです。

(事例5) 高校3年の夏、友人の1人が肝試しに行こうと言い出しました。友人4人で車に乗り、赤橋に行きました。橋の周りには物凄く不気味で、俺は寒気と嫌な感じがしましたが、友人たちはその姿を見て笑っていました。

橋の側には廃墟があり、そこに車を止めて降りたのですが、廃墟からは気分悪くなるほど変な

空気が漂っていました。「ここは絶対やばいって。もう十分だから帰ろうぜ」と言うと、3人の友人も流石にまずいと思ったらしく、「お前がそこまでいうなら、写真撮って帰ろうぜ」と言い、カメラを取り出し撮るように促されました。廃墟をバックに友人3人を撮ろうとしたのですが、シャッターがなかなか下りません。何度か試しているとうまくシャッターが下りました。友人は調子にのり、「次は中で写真撮ろうぜ。それで最後にしよう」というので、廃墟の中へ入りました。廃墟は窓ガラスが割られ、壁には落書きがあり、中にあったテーブルや椅子はボロボロになっていました。冷や汗が出て、悪寒がしてきました。今度は中央に立たされ、その両脇を友人2人が挟む形で写真を撮りました。やはりなかなかシャッターは下りません。ようやくシャッターが下りると、逃げるように帰りました。

夜も遅くなったので自分の家に帰り、眠りにつき、夢を見ました。真っ暗な空間に赤橋がくっきりと姿があって、自分は赤橋の手すりの上に立っていました。すると、遠くから「おいで、おいで・・・」という声が聞こえてきて、無数の白い手が手招きをしているのです。必死に「ふざけんな。絶対、そっちになんか行くか」と叫んだのを覚えています。

目が覚めると、昼過ぎになっていました。キッチンに行くとお袋がいて、俺の顔を見るなり言いました。「あんた、昨日は変な所にいったでしょう？」と問い詰められ、俺は一連のことを話しました。お袋は怒りながら部屋に塩を撒き出し、俺にも塩をかけました。その後、昨晚のことを聞きました。深夜、俺の部屋から笑い声が聞こえてきて、その声でお袋が起きてしまったそうです。お袋は友人を連れて遊んでいるのだらうと思い、注意しに俺の部屋に行きました。しかし、部屋の灯りは点いていなく、笑い声だけが聞こえるので不審に思い、扉を開け覗いたところ、俺が寝ている上の空中をグルグル飛びまわっている女の姿があったそうです。女は髪が長く白装束で、「キャキャキャ」と笑いながら、飛び回っていました。その姿を見たお袋は怖くなり、自分の部屋に引きこもり、朝になってから塩をまいて追い払おうと思った矢先に、俺が起きてきたというのです。その日の内に霊媒師の所へ行って、お祓いをしてきました。霊媒師からは「他に一緒にいた人がいるはずだから、その人たちも連れてきなさい」といわれ、友人に連絡してみるものの返答がありませんでした。

数日してから一緒に行った友人の1人から電話がありました。写真ができたので、すぐに来てほしいと言うのです。友人は顔面蒼白で玄関の外で待っていました。家に1人でいるのが怖かったそうです。写真を見せてもらおうと、1枚目の廃墟の外で撮った写真には、屋根の上から幾つもの顔がこちらを覗いており、ドアや窓からは白い手らしいものが出ていました。左側に移っている友人は片方の足が消えていて、残りの2人は手が消えていました。2枚目の廃墟の中の写真には、食器棚の裏に顔があり、手がこちらに伸びていました。窓からも顔がこちらを伺っておりました。その中の友人たちも手や足が消えていましたが、俺だけ首と手足が消え、胴体だけ写っていました。これはまずいと思い、大急ぎで残りの友人を集め、霊媒師の所へ行き、写真やネガも処分してもらいました。

(事例6) 4年くらい前の夏、大学時代の友人を連れて肝試しに行きました。その時、橋の中央あたりを散策していると、友人の彼女が半狂乱状態に陥りました。「お母さん、お母さん」などと叫びながらフェンスをよじ登り始めたのです。二人で体を押さえたのですが、大変なところでした。橋近くにある廃屋のレストランに棲みついている霊にとりつかれたのでしょうか。

このような「心霊スポット」での体験談が「心霊体験」とよばれる一種の怪談話として、インター

ネット上で語られていた。これまでの民俗学的解釈によれば、「阿蘇の赤橋」は、この世と異界の接点であるという意識から怪異を体験したことになる。言い換えれば、阿蘇大橋が阿蘇神話の世界・聖域と日常の世界・俗世を繋ぐ橋と認識された結果である。

だが、黒田乃生によれば「江戸時代末期には坊中が阿蘇山の登山口だったと考えられる。坊中からの道の途中に番所があり、新しい草履に履き替え登山したという。他の道から登山したものが、僧侶や山伏に発見された時には、神域仏地を汚すものとして、追い返されるようになっていたが、阿蘇山は神聖なものとして一般的に広がっていたため、坊中以外から登山するものはいなかったとされている」という（黒田乃生 2012 55～56）。坊中は現在の阿蘇駅側で、こちらが近世期末において正式な登山ルートとされ、戸下温泉などを通る南郷谷の登山ルートは、近代以降に生み出されたものである。そして、阿蘇大橋も近代にできたものであり、怪異を体験したり語ったりする人々の中心は若者たちである。こうしたことから「悠久の過去から連綿と継続する心性」が、現代、語られている「阿蘇の赤橋」の怪異譚を生み出しているとは考えがたい。

実際、「阿蘇の赤橋」の怪異譚の中には、霊媒師や霊能力者は登場するものの、全く阿蘇山への信仰に関わる側面が見られない。特に「心霊スポット」として認識されていることから分かるように日本でオカルトブームが起きた1970年代以降だと考えられる。また、語り手や心霊体験をする者の多くが若者であり、体験者は肝試しのためにわざわざ阿蘇大橋に行く点が上げられる。体験者は怪異現象を期待してやってくる地元住民以外の者たち、余所の若者である。「都市伝説」の担い手である。その上、幽霊も因果などが語られず、具体性が乏しく、誰々の幽霊だとされず、匿名性が高い。

そして、怪異現象の舞台となるのが、事例1や事例5のように橋のそばにある廃墟であったり、事例2や事例3のように橋の下の河川敷が舞台になっていたりしている。橋そのもので怪異に遭うケースは少ない。それどころか、事例6のように橋よりも廃墟に怪異現象の原因を求める話もある。高岡弘幸は、「近代以降の怪異の代表である幽霊について考えると、幽霊とは人の死霊であり、かつて、その場所に住んでいた、あるいは、そこで悲惨な事件があったなど、誰かが存在していたことを示すものである。ということは、幽霊とは、人（死者）の記憶であると同時に、幽霊が出現する「場所」の記憶であると捉え直すことができるはずである」という（高岡弘幸 2006 115）。そこで、これらのことを加味して、次は場所の歴史・阿蘇大橋周辺の歴史について考えたい。

第3章 阿蘇大橋ができる以前の歴史・戸下温泉の盛衰

阿蘇大橋着工時の仮名は「戸下橋」であった。阿蘇大橋を南へ渡る時、眼下の右に見える辺りは「戸下の七曲り」と呼ばれる道があり、南郷谷の玄関口であった。阿蘇カルデラの西壁が雨水の侵食、あるいは断層によって切られてできた谷間、いわゆる立野火口瀬の中に位置する。その七曲を下っていったところに戸下温泉と呼ばれる温泉街があった。泉質は重炭酸土類含石膏芒硝泉で、黒川が白川に合流する手前の安山岩質断崖の割れ目からの自然湧出を掘削して泉源とした栃木温泉から温泉を引いている。泉量の多い横穴式温泉としても有名であった。それ以前は、林業が行なわれていた地域だった。

戸下温泉は明治16年（1823）に開かれた（岩本政教編 1985 82）。黒川と白川の合流し、北向山の原生林を眺める風光明媚な地であり、徳富蘇峰などが次々と訪れ、一躍有名温泉となった。夏目漱石は『二百十日』執筆前に投宿し、その後、阿蘇山に登っている。戸下温泉の開発には地元の有志が奔走し、碧翠楼という旅館を作り、代々経営にあたった。

明治32年（1899）1月21日の『九州日日新聞』によれば、熊本県雑種税のうち温泉地等級をみると、一等が山鹿温泉、二等は日奈久温泉だが、三等に栃木温泉が、また四等に戸下、地獄、垂玉温泉が

入っている（長陽村史編纂室編集 2004 601）。明治41年（1908）7月9日の同じ『九州日日新聞』によると「南峡には栃木、戸下、地獄、垂玉、湯の谷の五温泉を有し、就中戸下、栃木は概して中流以上の浴客多く（以下略）」とある。

大正15年（1926）の『阿蘇郡誌』によると「明治一五年一六年の頃、赤峯氏等の尽力によりて、栃木温泉の泉場を引いて浴場を創め、故長野一誠翁の努力によりて暫時発達し来たるが、大正七年より全戸下一円、長野眞一氏によりて経営する事となり、近時著しく面目を改め浴室旅館とも最新の設備を施し、年を追ふて繁栄に向かひつつあり」と書かれている。そして、「戸下温泉は黒川白川の合流せる溪谷内にあり。翠巒（緑山の事）四周を圍繞し、両川の清流に臨み、南には北向山高く聳立して夏は碧翠滴るが如く秋は紅葉錦を彩り水容山色風光美に絶佳の土地なり（中略）宮地線立野駅より宮崎県道を東十八町、自動車・馬車の便あり。旅館は碧翠楼一軒にして設備最も完備し、浴室は特等湯、普通湯、家族湯の三個あり、間敷（部屋の事）併せて五十を有し、収容人員約三百人、宿料旅籠一円五十銭より五円位、自炊一日八十銭以上、一ヵ年の浴客延人員約三万をこえ、夏季及び観楓期（秋の事）は遊客殊に多し」とある。また、当時着工したばかりの南阿蘇鉄道についてもふれ、「近く南郷鉄道開通せば白川峡谷の大鉄橋はこの温泉場より眺められて実に天下の偉観と思はる」と記している。

昭和3年（1928）の『阿蘇観光ガイド』によれば「交通便利なるが故に、日帰りによし、宿泊更に可なり。玉突台等の設備あり、秋の紅葉、春の桜、恐くは当温泉場の独占と云ふも過褒ではあるまい」「電話各地に通じ、入浴しつつ御用便が出来ます。団体のお方へは五百人迄の設備あり、予め御一報あれば立野駅へ自動車御出迎へ致します」とあり、昭和35年（1960）のものには「おおいかぶさるように繁る原始林をながめながら、河原の温泉プールでの一泳ぎは爽快だ。黒川を眼下に見ながら蛇行する山道、七曲の難コースには桜並木が続き、春の花見から秋の紅葉狩りと行楽には最適」と書かれている。業績は順調だったと想定される。

ところが、南郷観光地化の切り札として、自動車用に昭和45年（1970）に阿蘇大橋ができたことにより戸下温泉は大きな転機をむかえる。

第4章 橋の開通がもたらした影響

阿蘇大橋ができたことにより、人の流れが戸下温泉のある南郷谷の谷底を通らず、上空の阿蘇大橋を流れ始めた。阿蘇大橋は多くの車を南郷へ呼び込んだが、その前にあった戸下温泉郷は通過地点に変わっていった。

阿蘇大橋ができることにより、交通網の開通により都市が発展したり衰退したりするいわゆる「ストロー効果」が起き、戸下温泉などを急激に寂れさせたと見ることができる。小野政一らによれば「ストロー効果については多くの文献が「高速交通機関の整備により集積の大きな都市に小さな都市の都市機能が吸収される効果」と定義しているが、一部には「高速交通機関の整備によるその経路上の中間地域の空洞化現象」という定義もある」としている（小野政一・浅野光行 2005）。戸下温泉の場合、後者に該当すると考えられる。阿蘇大橋の横にある廃墟となった建物についても同様なことがおきた結果だといえる。

そして、戸下温泉の衰退に追い打ちをかけたのが立野ダム建設計画であった。昭和59年（1984）の立野ダム損失補償交渉妥結調印により、栃木温泉は川下から上がって営業を続けたが、戸下温泉は運営を続けるだけの力を失ってしまい、200年の歴史に幕を閉じた。戸下温泉の中心的役割を担っていた碧水楼があった場所に、ダム建設のため、土砂を運ぶように掛けられた長陽大橋の橋脚がそびえたった。

熊本地震以前から南阿蘇地域の人口は平成7年（1995）には20567人だったものが、平成12年（2000）

には19736人まで減少している（国土交通省九州運輸局 2007 3～4）。国土交通省九州運輸局の報告書によれば「南阿蘇地域（南阿蘇村・高森町）の人口は、緩やかに減少傾向にある。一方、年齢構成は、老年人口比率が30%を越え、高齢化の進展が顕著である」と記されている。阿蘇大橋などが架かることによって、若者たちが福岡市や熊本市などの都市圏に流出し、残された高齢者で地域が成り立っていたと推測され、小野らのいう「ストロー効果」の前者も起きていた。

同じく熊本の「心霊スポット」として知られる宇城市三角町の天草パルラインホテルも同様な背景を持っていた。天門橋ができた当時は大きな橋が珍しく、それを目当てに多くの客でにぎわったが、次第に通過地点になっていき、1970年代に入ってから経営難となり、そのまま廃業となった。建物は「心霊スポット」として知られるようになった。そして、天門橋は天草から人々を流出させていくことに繋がった。植木英貴によれば、熊本市への転入してきた先として「平成25年の数値で、100人以上の転入超過となったところは、天草市が290人、八代市が302人、玉名市が146人、上天草市が117人、人吉市が114人となっており、特に天草地域からの転入が多い」という（植木英貴 2013 31）。天門橋による「ストロー効果」が今もなお続いている。

猪原龍介によれば「交通インフラの整備は地方経済に対してマイナスの効果を持つこともしばしば指摘されてきた。すなわち、地域間の輸送費（人の移動費）の低下により地域間移動が短時間で済むようになると、地方においてこれまで支店を置いて地元企業との取引に対応していた地域も都市からの日帰り出張などで対応することが可能になり、結果支店を閉鎖して人員を大都市圏の本社に集中させることが考えられる。その結果、地方での雇用が失われ、人材が流出することになる。また消費者の購買行動についても、新幹線などにより大都市圏へのアクセスが容易になることで、これまで地元商店から商品を購入してきた人々が、購入先を大都市圏の商店に切り替えることが考えられる。結果、地方企業の出荷額が減少し、閉店に追い込まれることも考えられる」という（猪原龍介・中村良平・森田学 2015 2）。

新しい橋ができることによって、急激に栄えていた場所の人通りが減り、閉店する店や空き家が増えていき、最後には廃墟だけが残る。その動きに人々は不安を感じ、それに人々は怪異を見るのではないかと考える。それを裏づけるように「阿蘇の赤橋」の怪異では、事例1や事例5のような橋の横にある廃墟や事例2や事例3のような橋の下になった戸下温泉郷跡が舞台になっているものが多い。西村清和は「場所の記憶と廃墟」という論文の中で下記のように述べている（西村清和 2009 11）。

過去と未来の展望に拓けた日常の生活空間をそれで廃墟に立ち入るとき、われわれはなによりもその場所の存続をつよく知覚する。廃墟にたたくむわたしのまなざしは、そこに堆積する遠い記憶の残骸をとおして、わたしがくいま・ここ>の自己知覚と同時に知覚しているこの場所、自分が生まれてこの方ずっと立ちつづけているはずの、自分と共存し存続する地面が、おなじようにその自己知覚が接合したはずのかつてのりびとの生きた場所とひと続きの地面として露出しているのを見届ける。そこに散乱する過去の実績の残骸や記憶の破片は、かれらの歴史が完全に終わったこと、もはや二度ととりもどせないことを見せるが、それだけにいっそうこれらの残骸や破片は、それらをなお残存させつつわたしのくいま・ここ>に立ち合わせている、その場所そのものの不動の存在をたしかなものとして経験させる。

高岡や西村の見解をふまえると、廃墟や廃村という場所の記憶が「心霊体験」として語られるもの要因の一つだと考える。実際、天草パルラインホテルは解体されると、そこにまつわる新たな怪異譚が生まれなくなった。

また、橋ができたことによる新たな人々や物の交流も大きな要因になっていると考えられる。国土

交通省九州運輸局の報告書によれば「阿蘇地域は熊本県で最も観光訪問者数の多い地域であり、年間1600万人以上が訪れる」という（国土交通省九州運輸局 2007 3）。

柳田國男の『遠野物語』には多くの怪異談が載っているが、川森博司によれば「前近代の遠野においても、外部との人と物との交流が前提としてあり、そこから『遠野物語』に収録されたさまざまな話が生み出されてきた」と述べている（川森博司・ほか編 2008 7）。実際、赤橋の怪異の体験者や語り手は橋周辺に住んでいない余所者、外部のものである。阿蘇においても橋がかかり、外部との人と物との交流が盛んになったことによって怪異譚も生まれたと考えられる。

これらは言い換えれば、現代山村の持つ不安定さ・力動性が呼び起こすものだといえよう。安村克己によれば、現代山村の4つの力動性をもっているという（安村克己 2013 4～6）。1つ目が「山村における個人と地域の生活状況は、「山地」という「自然の基盤化」に決定的に条件づけられる。山の自然環境は、そこに居住する人々の生活に、様々な恩恵をもたらすと同時に、様々な困苦をももたらす」という。2つ目は「孤立化」が浮上する。（中略）現代山村では、道路、輸送手段、通信手段などが整備され、その孤立度は従来よりも解消されてきたが、それでも生活圏の孤立度や住民の孤立感はいまだ高い」としている。3つ目として「自立性」をそなえる。外部から孤立し完結した生活圏である山村において、住民各戸は、それぞれに複合的生業による自給を基本とし、集落内の互酬・相互扶助で支えられた生活を営む」という。そして、4つ目は「山村の近代史に繰り返されてきた「周縁化」がある。そもそも、日本の山村は近世の商業資本主義期以来、常に経済や近代化において都市—中心の周縁に位置づけられ、資本主義経済の浮き沈みに翻弄されてきた。近代化や資本主義の恩恵は、山村にほとんど及ばない（中略）平地部の市場経済が現代山村に浸潤すると、資本主義経済の構造的転換や不況などの動態に伴い、（中略）それらの影響を受けやすい現代山村の経済は、即座に経済的危機に陥る」と述べている。戸下温泉に代表されるような南郷谷周辺の山村は、阿蘇大橋がかかることによって、現代山村の力動性が働いたと考えられる。

特に2つ目と4つ目には、安村のいう現代山村の力が大きく働いたと考えられる。阿蘇大橋が架かり、周辺からは通過地点として取り残され「孤立化」する一方、経済的には都市部の影響を強く受けるようになり「周縁化」し、その結果、戸下温泉は廃れたといえよう。それを裏づけるように、南阿蘇村住民福祉課のデータによれば、平成27年（2015）度は世帯数が4744世帯で、転入者数482人、転出者数479人だったが、熊本地震後の橋が落ちた後は、平成28年度は世帯数が4522世帯で、転入者数326人、転出者数830人となり、人口が急激に減っていつている。阿蘇大橋が落ち、南阿蘇村の人口が急激に流出したということは、南阿蘇村が村単体で成立しなくなっており、都市の「周縁化」していた証拠だともいえよう。

これらにより過去の繁栄を知っている地元の人々だけでなく、そこに廃墟や遺物が残されている限り、外部の人間でも現代山村の力動性が感じられ、それが人々に無常観や不安感を呼び起し、怪異を体験させることに繋がっているのではなかろうか。

そして、橋と同じように「心霊スポット」とされる日本各地のトンネルも同様な側面が見られる。新しいトンネルが作られ、これまで使用されていたトンネルが古いものとされると、怪異現象の起きる場になることが多い。熊本で「心霊スポット」として有名になった「日佐敷トンネル」も国道3号線に新しいトンネルができたことと関連している（註2）。これも人や物の流れの変化に伴う急激な地域の変容がもたらした怪異譚ともいえよう。

次に地域の変容によって生み出された怪異譚が現代社会にどのような影響をあたえるのか考えてみたい。「阿蘇の赤橋」の怪異譚が生み出され、語られることによって、現実の阿蘇大橋へどのような影響をあたえたのか検討する。

第5章 怪異譚が現実へあたえる影響

阿蘇大橋に関する心霊に関する噂が、口コミからインターネットの世界に広がり、「阿蘇の赤橋」の話が形成されていく。その頃から現実社会へも影響を与えるようになる。「阿蘇の赤橋」の話が広がると1980年代頃から「ここから身を投げれば絶対に死ぬる」という噂も付随するようになり、自殺志願者が訪れるようになった。阿蘇大橋は怪異の場から自殺者が多発する場所として社会問題となり、行政が対応しなければいけない状況になった。『朝日新聞』（2011年12月18日）によれば、昭和56年（1981）から平成23年（2011）12月までに59件の投身自殺が発生していたことから、熊本県は平成2年（1990）に橋の両端から水平に張り出すかたちで約1・5メートルの柵を、平成14年（2002）には高さ約2メートルの忍び返し付きのフェンスをそれぞれ設置し、平成6年（1994）には橋の塗装を灰色に塗り替えた。平成23年（2011）12月の時点では、自殺防止対策の結果、平成14年（2002）以降の投身自殺は4件にとどまったという。

投身自殺が多発した時期は、インターネットが家庭に普及していった時期と重なる。高岡弘幸によれば「都市伝説や怪異譚は口コミ以外に、インターネット上に書かれ増殖するのが、現代という時代である。ところが、同じインターネットでも掲示板やブログではなく、数年前から、その主流はツイッターとなっている。（中略）そのため、自然に話が短くなったというわけである」という（高岡弘幸 2015 239～240）。それを裏づけるように「阿蘇の赤橋」の怪異譚には、事例3・4・6のように短いものもあり、インターネットの存在が、阿蘇大橋を「心霊スポット」として位置づけるのにより強く影響していたことが分かる。

そして、「心霊体験」にインターネットの特徴が強く反映されている、もう一つの要素として出没する幽霊の匿名性もある。播州皿屋敷の「お菊」、四谷怪談の「お岩」といった名のついた幽霊は近代以降、次第に姿見を見せなくなる。切掛けの一つは、太平洋戦争による大勢の人々の死が「英霊」あるいは「戦死者」という抽象的な概念で祀られたことなどにあると考える。戦後も急激な都市化と核家族化にともない、匿名性は顕著なものになっていく。そして、インターネットの出現により、その性質である匿名性と拡散性と相まって、匿名な誰かの死と、それに伴う匿名な幽霊の出現は死をより抽象的な存在、漠然とした存在に変えていった。誰々の幽霊という認識がされない匿名性が、自殺をより容易なもの、身近なものにしていったのではないかと考える。こうした状況により阿蘇大橋での自殺者が増え、それが新たな怪異譚を生み出す悪循環を生み出した。これらにより、阿蘇大橋は虚実が入れ混じった存在になっていった。

そして、熊本地震が起き、阿蘇大橋が落ちる。だが、その出来事は当初はデマだとされた。『日本経済新聞』（2016年4月23日）によれば、「二〇一六年四月一六日未明の本震後、熊本県南阿蘇村の「阿蘇大橋」が崩落したという情報が、報道やインターネット上で飛び交い始めた。結果的にこの情報は真実だったが、当時は真偽を判断する材料がない。熊本地震の取材で現地入りしていた日経コンストラクション記者は、自分の目で確かめるため、一六日朝に熊本市内から国道五七号をたどって南阿蘇村に向かった。頻発する余震で眠れぬ夜が明け、ヘリコプターやドローン（小型無人航空機）による空撮映像などが出回るまで、阿蘇大橋の落橋は噂の域を出なかった。かくいう筆者も半信半疑だった」という。阿蘇大橋は実際、土砂崩れにより崩れ落ちており、阿蘇大橋付近を車で通行中の大学生一人が行方不明になり、同年8月に阿蘇大橋の下流で遺体が収容される惨劇になっていた。これらは虚実が現実を覆うことによって、一つの弊害が出た事例としても捉えられる。

内田忠賢は、秋葉原の「おたく」文化をふまえ「かつては、都市から発信される流行、風俗といっても、その伝播には、物理的距離が関係した。銀座の流行が地方都市に伝わるのに、昔は、タイムラグがあったのである。しかし、現代では、TVほか、いわゆるマス・メディアに、インターネットが

加わった。距離による、情報の時間差が少なくなったのである。しかし、人口の集積は、あなどれない。バーチャルな世界だけでは、秋葉原のような場所は生まれないのである」と述べている（内田忠賢 2009 35~36）。

こうしたことを念頭におくと、「阿蘇の赤橋」の伝承が広がった背景には、周辺地域の都市部、熊本市や大分市、そして福岡市などへの人口集積の影響と南阿蘇地域という人口減少地域の関係性が大きいと考えられる。柳田國男は『都市と農村』の中で、農村の疲弊と農民の貧困を農村内部の問題として理解するのではなく、農村経済を衰退に追い込んだ都市との関係で理解することの重要性を説いた。そのことが、現在の日本でも残された課題であると実感させられる事例でもある。

まとめ

従来の民俗学では、橋で怪異が起きるのは、橋は対岸を結ぶだけでなく、この世と異界（あの世・他界）を結ぶものとして、日本人が長年認識してきたためだといわれてきた。

だが、阿蘇大橋の例を通して考えると、橋がかかったり、トンネルができたりすることにより起きる交通量・地域の変容など、いわゆる「ストロー効果」が橋やトンネルの怪異譚を生み出すことに大きな影響を与えていた。そして、橋やトンネルができることによる、新たな外部との交流も怪異譚を生み出す要因になっている。また、生み出した怪異が現実社会へ及ぼす影響もあった。「阿蘇の赤橋」の場合は、自殺者の増大という形で現実社会に影響を与え、それが新たな怪異の要素となる循環を生み出していた。

こうしたことをふまえると、現代の怪異譚は「悠久の過去から連綿と継続する心性」として捉え、従来の民俗学的な分析をするだけでなく、地方における現代社会が抱えている様々な課題まで含めた考察が求められているといえよう。「経世済民の学」としてはじまった民俗学としては、橋やトンネルの怪異譚に表象される、地方における人口流出問題やそれにとまなう過疎化に気づき、向き合っていくことが大切だと考える。

また、橋の怪異を通して「心霊スポット」について分析してきたが、地方において「心霊スポット」は、地域社会の危機を示す一つの目印として働いているのではないかと考えられる。それを裏づけるように橋やトンネルの怪異だけでなく、限界集落問題が大きく取上げられるようになった前後から廃村の怪異、例えば、「杉沢村」の都市伝説なども多く語られている（註3）。幾つかの廃村が「杉沢村」などの候補とされ「心霊スポット」として位置づけられていった。このようなことから「心霊スポット」の発生は、地域社会の終焉近くに見せる、人が死ぬ間際にみる走馬灯のようなもの、言い換えれば、人口流出にとまなない地域社会が崩壊し、無くなっていき、更に土地の記憶に変わっていく過程で生まれたものだともいえよう。

今後の課題として、近年問題となっている地域格差が「心霊スポット」の発生とどのように関係しているのか、また、都市の縮小化と地方の過疎化がどのような影響を与えるのかなどを検討する必要があると考えている。そして、新たに造られる阿蘇大橋をめぐって、如何なる語りがなされていくのか、注意深く見ていきたい。

註1 2018年にインターネット上で確認が取れた「阿蘇の赤橋」に関する怪異譚の代表的なものを著者が要約した。参考にした主なサイトは以下のものである。

事例1 https://www.excite.co.jp/news/article/Tocana_201710_post_14710/
(2018年12月20日アクセス)

事例2 <http://unnickeled63.rssing.com/browser.php?indx=52849135&item=19>
(2018年12月20日 アクセス)

事例3 http://blog.livedoor.jp/oni7_blogstand4/archives/50931265.html
(2018年12月20日 アクセス)

事例4 <http://kowabana.jp/boards/40323>
(2018年12月20日アクセス)

事例5 <https://matome.naver.jp/odai/2150228661746440501>
(2018年12月20日アクセス)

事例6 https://www.excite.co.jp/news/article/Tocana_201710_post_14710/
(2018年12月20日アクセス)

註2 正式名称は佐敷隧道で、明治36年(1903年)に造られた煉瓦造りのトンネルで、長さ434m、幅5.5mある。2002年8月21日に登録有形文化財に指定されている。怪異譚としては「旧佐敷トンネル」といわれ、建設中に落盤事故が起き、数人の犠牲者を出し、そのため、この辺りでは霊の目撃や怪奇現象に遭遇することが多いとされている。肝試しでトンネルを訪れた人が、トンネル内で行方不明になった、あるいは幽霊が出没して、車を事故に遭わせる。また、夜中にトンネルを抜けた後、存在しないはずの道路が出来て、車が引き寄せられ崖下に落下する「幽霊坂」が出るといわれている。

註3 限界集落については、旧国土庁が1999年に調査し、その後、農林水産省2005年、国土交通省2006年に発表している。「杉沢村」の都市伝説は、2000年にテレビ番組で取上げられ話題を集める。その内容は、かつて青森県の山中に杉沢村という村があって、昭和の初期「一人の村人が突然発狂し、村民全員を殺して自らも命を絶つ」という事件が起きたという。誰もいなくなった村は、隣村に編入され廃村となり、地図や県の公式文書から消去されたが、その廃墟は悪霊の棲み家となって現在も存在するといわれ、幾つかの廃村がその場所だとされている。

参考文献

朝里樹 2018『日本現代怪異事典』笠間書院

荒木精之編著 1975『熊本の風土とところシリーズ9 熊本の伝説』熊本日日新聞社

飯倉義之 2015「学校の怪談」市川秀之・ほか編『はじめて学ぶ民俗学』ミネルヴァ書房

猪原龍介・中村良平・森田学 2015「空間経済学に基づくストロー効果の検証—明石海峡大橋を事例として—」独立行政法人経済産業研究所

岩本政教編著 1985『熊本の風土とところシリーズ 第3集 29 熊本の温泉と休養地』熊本日日新聞社

植木英貴 2013「熊本市の人口動態の分析及び福岡市との比較考察」『熊本都市政策』2 熊本市都市政策研究所

内田忠賢 2009「都市の生活誌」『日本の民俗10 都市の生活』吉川弘文館

小野政一・浅野光行 2005「高速交通機関がもたらすストロー効果に関する研究—長野新幹線沿線を対象とした統計データによる検証—」『土木計画学研究・講演集』32

川森博司・ほか編 2008『日本の民俗3 物と人の交流』吉川弘文館

黒田乃生 2012「阿蘇山の国立公園指定の経緯と観光登山の変遷」『ランドスケープ研究』No.5 日本造園学会

国土交通省九州運輸局 2007『南阿蘇における新交通システム(DMV)導入による公共交通活性化

に関する調査 報告書]

- 住家正芳 2014「心霊写真とパワースポット」民俗学事典編集委員会編『民俗学事典』丸善出版
- 高岡弘幸 2006「幽霊の変容・都市の変貌」『国立歴史民俗博物館研究報告』一三二集 国立歴史民俗博物館
- 高岡弘幸 2015「幽霊の物語から靈感の話へ—現代日本の世相の解説—」小松和彦編『怪異・妖怪文化の伝統と創造——ウチとソトの視点から』国際日本文化研究センター
- 長陽村史編纂室編集 2004『長陽村史』長陽村
- 常光徹 2009「ふしぎな世界と空間」福田アジオ・ほか編『図説 日本民俗学』吉川弘文館
- 土居治 2014「幽霊と霊魂観」民俗学事典編集委員会編『民俗学事典』丸善出版
- 西村清和 2009「場所の記憶と廃墟」『美学』第60巻1号(234号) 美学会
- 安村克己 2013「山村」再生の実践に関する生活空間再生論の新たな視座』『地域創造学研究』23 奈良県立大学
- 柳田國男 1991「都市と農村」『柳田國男全集 29』筑摩書房

A Study of the Bridge Differentiation and the Community in the Modern Period
- Occurrence of "spiritual spots" accompanying the outflow of population -

Daisuke FUKUNISHI

Abstract

A strange thing happens at the bridge is that in folklore studies it is said that the bridge is not only connected to the opposite shore but also because the Japanese have recognized for many years as a connection between this world and the other world. However, considering the example of Aso Bridge, changes in the population caused by bridges have a major influence on creating a monster. Also, the exchange with new outside due to the bridge being made is also a factor to create a monster.